

日本文学と西洋文学

日本文学と西洋文学

アルマンド・マルティンス・ジャネイラ

亀井俊介・新倉朗子・亀井規子訳



集英社

JAPANESE AND WESTERN LITERATURE
by Armondo Martins Janeira
Japanese translation rights arranged
through Charles E. Tuttle Company Inc., Tokyo



日本文学と西洋文学

昭和四十九年四月二十日 初版印刷
昭和四十九年五月二十日 初版発行

訳者

亀井俊介・新倉朗子
亀井規子

発行者

陶山 巖

印刷所

大日本印刷株式会社

発行所

集英社

101 東京都千代田区一ツ橋二ノ五ノ十
電話 東京(三六)六一一 番

凡 例

一、本書は Armando Martins Janeiro, *Japanese and Western Literature: A Comparative Study*, Charles E. Tuttle Co., Tokyo, 1970 のうち、第七章、第十章の一部、および第十一章をのぞいて、第一部と第二部を全訳したものである。著者はこの邦訳のため原書を加筆修正された箇所があるので、邦訳はそれに従った。なお本書全体の構成については、巻末の「解説」を参照されたい。

二、外国人名は、つとめて原名の発音に従ったが、日本で現在一般的に使用されている表記法をも重んじ、いたずらな混乱を避けた。

三、日本文学の作品名には、原書で使用している英語訳を付した。日本詩歌の引用についても同様である。原書で日本語を用いている箇所は、片カナで振仮名をつける（「御歌所」^{オウタゴロ}「歌碑」^{カヒ}など）か、片カナだけ（「サムライ」「サビ」など）で表現した。これらは、いずれも、日本文学と西洋文学の掛け橋をしようとする原書の特徴を、少しでも翻訳に生かしたかったからである。

四、日本文学作品の引用のうち、二字下げで組んだ独立のものは、原則として、日本語の原文を用いたが、本文中に組み入れられたものについては、前後の関係で判断

し、強いて統一しなかった。

一、文中の「」は、翻訳者がつけたものである。原書中の単純な不注意による間違いは適宜訂正して訳したが、問題が残る場合には「」で補った。日本語原文の引用中、難解と思われる語句も「」で説明をつけ加えた。

二、注は（）で番号をつけて、各章の最後にまとめた。原注の場合は、それぞれの注の最後にその旨を明記した。それ以外は訳者の注である。

三、翻訳は巻末の「翻訳分担一覧」に示した分担作業によって行なったが、亀井俊介が全体に目を通し、統一をはかった。ただし注の体裁には訳者の個性を重んじた。

四、なお、原題にもある「比較文学研究」の便宜に資するため、附録として、「海外で出版された日本文学研究書一覧」を巻末に付した。これは日本ペンクラブのご好意によるもので、感謝の意を表したい。

日本文学と西洋文学 目次

日本語版の序

序章 文学の世界性

第一部 文学にあらわれた日本文化と西洋

第一章 古典詩歌

古典文学概観 日本詩歌の形式と内容 古典的アンソロジー 詩歌の概念
限界 芭蕉——西洋の象徴詩との対比 自然観 恋愛観 世界の詩歌に
ける日本的抒情の重要性

第二章 古典小説

日本における小説の発生 源氏物語 『源氏物語』における小説の概念、
および西欧における小説の概念 生活の観念 愛の観念、美の信仰 時間
の観念 偉大なシンボル——光源氏とドン・ファン

第三章 日記

平安朝の日記文学 『和泉式部日記』 『紫式部日記』 清少納言の日記
鴨長明と吉田兼好の覚え書 芭蕉と一茶の詩的日記 西欧の日記との対比

第四章 ビカレスク（放蕩無類）小説

大衆小説 井原西鶴 江島其磧 十返舎一九 ビカレスク小説と浮世絵
日本と西洋のビカレスク小説の比較

第五章 怪奇小説

東洋と西洋の怪奇物語の特徴 上田秋成 滝沢馬琴 怪奇小説・幽霊小説・
殺人小説 殺人小説の無意識の空白 殺人小説とヌーヴォ・ロマン

第六章 演劇

能、歌舞伎および人形芝居 劇文学と舞台芸術 近松門左衛門 人形芝居
伝統の重み 現代日本演劇の矛盾

一〇五

第七章

はじめて西洋文学と接した時代の作家たち
明治時代における西洋の影響 森鷗外 夏目漱石 芥川龍之介

一二四

第八章

現代日本作家における西洋の影響

西欧からの挑戦 二つの主な思潮——マルクス主義とキリスト教 新しい
詩人たち——西洋の刺激 与謝野晶子 石川啄木 若山牧水 小説家たち
永井荷風 志賀直哉 谷崎潤一郎 菊池寛 大仏次郎 芹沢光治良 中河
与一 井伏鱒二 川端康成 竹山道雄 堀辰雄 丹羽文雄 林芙美子 円
地文子 井上靖 大岡昇平 太宰治 武田泰淳

一二四

第九章

若い世代の作家たち

日本の新しい社会状況と知的動向 現代の小説家 遠藤周作 安部公房
三島由紀夫 原田康子 石原慎太郎 大江健三郎

一六三

第二部

日本文化の本質

第十章

叙事詩と悲劇

叙事詩的ヴィジョンと悲劇的ヴィジョン 東洋思想と西洋思想における叙
事詩的なものと悲劇的なもの 行動の表現としての叙事詩と悲劇 仏教思
想とキリスト教思想からみた叙事詩的なものと悲劇的なもの

一六九

第十一章

叙事詩の人生観

東洋と西洋の英雄神話 日本の叙事詩的遺産 叙事詩的理想 叙事詩的昂
揚の欠如 叙事詩の近代的展開 近代の小説と戯曲における叙事詩的価値
叙事詩に対する未来の展望

一七五

第十二章

生の悲劇的感情

悲劇の本質 悲劇的ヴィジョンと近代人 悲劇的なものと喜劇的なもの
東洋思想と西洋思想における悲劇的対立 悲劇的なものにおける日本的要素——同情とはかなさ 唯美主義と人間性脱却 特別な唯美主義的語彙
日本の生活における唯美主義——花の芸術と茶の芸術 人間感情の抑制と特殊な様相のユーモア 喜劇の欠如 日本と西洋のヒューマニズム 死生観

三〇

第十三章

日本の文化の特徴と傾向

神道の思想 仏教の思想 神仏混淆 神道、道教、儒教 宇宙に融合する人間 形而上学的不安の欠如——受身の汎神論 罪と肉体の健康な輝き 複雑な単純さ 現代芸術における伝統の共通項 島国性とイマジネーション 異端の色合いのキリスト教 見すてられたアジア——未来はヨーロッパかアメリカか

三一

第十四章

日本文化の獨創性

中国の影響と日本文化の個性 日本芸術の獨創性 純粹な日本的創造 挑戦力としての西洋への劣等感

三二

解説

亀井俊介

三三

附録

海外で出版された日本文学研究書一覧

三三

日本語版の序

この本が日本、イギリス、アメリカで好評をもって迎えられたことは、本書を世に出す時に感じていた重苦しい不安から、私を救ってくれた。私はこの本が最も困難な、そして完全な処女地の分野を探索しようとする、極めて大胆な仕事であることをよく知っていた。つまりこれは、人間の精神に共通する類似性と、知的産物の土壌となる歴史的、社会的現実の相似性とを別とすれば、たがいに縁もゆかりもないかけ離れた場所で形成された二つの異なる文化を、比較しようとしたものである。

比較文学という学問はまだかなり新しく、比較研究はいままでのところよく似た思想やジャンルを生み出した地域についてだけ行われて、イギリス、アメリカ、フランス、ドイツの作家や文学運動の対比をこえることが減多になかった。ごく最近になって、さまざまな国語のアンソロジーが何冊か出版され、また同じ言語や「黒人性」という漠然とした共通の名称で結びついた新興アメリカ諸国の詩人の研究がいくつか出て、われわれの関心をかき立てている。しかしこれらの研究は、すべて同じ文明の中の、せまい文化地域に限定されている。私の知る限り、東洋の文化と西洋の文化を並列させた包括的な文学研究としては、本書が最初である。鴨長明をワーズワスと比べ、上田秋成をブロスベル・メリメ

と比べるというたぐいの短い論文は、従来もあった。しかしこのようにかけ離れた人物の断片的な比較には明かに欠点があり、それがこの種の仕事の興味をそいでいる。作家や個々の作品の比較は、その対比が文化形態や、類型や、一般的傾向のより大きな比較の実例になっているのでないと、常に、論者の特殊な好みを読者に押しつける恐れがある。あまりにもせまい比較は、あまりにも広い概括と同様に、危険なものとなりうるのだ。

このようにかけ離れた二つの文化の間の、思想や文学的成果の相違や類似には、誰かが巨視的な検討を加えるべき時機が来ていた。いまや私は、自分が敢てそれを行なったことを喜んでいる。その日本語訳がいまあらわれるという事実は、もちろん大層うれしいことだが、それだけでなく、私が意図において正しかったこと、私の苦労は無駄でなかったことを、ふたたび確信させてくれる。特に私がうれいのは、日本と外国の批評家諸氏が、私のなした対比——光源氏とドン・ファンという人物類型の、日本とスペインとのピカレスク小説の、紫式部とブルーストとの時間の觀念の、日本と西洋との叙事詩的人生觀と悲劇的人生觀との対比——を、確実な根拠あるものと考えてくれたことである。これらの主題は従来どれも取り扱われたことがなく、私はこれこそ自分の研究の最も独創的な部分だと確信しながらも、あまりに大胆すぎるのではないかと、恐る恐る提示したのであった。

この序文を、私はいま、長い日本滞在が終ったおおよそ一年後、ヨーロッパで書いている。私は好きな西洋作家に帰り、長年にわたって私の生活を感化し、最も深い喜びを与えてくれた西洋の書物を読み返している。いまこうして遠く離れてみると、私の見方

はいくらか変わった。しかし、この新しい見方においても、日本文学は相変わらず偉大であり、あらゆる国の人々に楽しみと、美と、知恵を提供する、重要な作品に満ちている。私は日本で、西洋文化が黙して語らぬものを、いくつか学んだ。

日本が戦後、世界の最も偉大な、最も進んだ国の一つになったことは、誰でも知っている。しかし日本文学が日本の近代性の最も素晴らしい表現の一つであり、今日の世界の最もすぐれた作家がもつ普遍的な魅力をそなえたものであることは、西洋では知る人が少い。

この本を今日にふさわしい内容とするため、私は新しい日本研究や、小説や、詩歌と、あらためて取り組まなければならなかった。私はいくつかの本や、好きな章節を読み直した。これは楽しい仕事であった。日本でそれらを読んだ時に私を感動させた深遠さ、優美さ、人間的な真実さは、いま遠くの土地にいる私に、多分、より健全な、より深い魅力をもって、訴えつづけている。

一九七二年八月

ローマにて
アルマンド・マルティンス・ジャネイラ

日本文学と西洋文学

序章 文学の世界性

世界をその人間的次元でとらえて読者に提供すること、つまり、離合集散ただならぬ人間の前に姿をあらわす世界を、そのままとらえて読者に示すことは、文学のユニークな役割だとシモエヌ・ド・ポーヴォワールは述べている。文学の目的は、われわれに世界を自覚させること、あらゆる人に自分の人間性をより深く知らしめることである。文学は、本質的に、他のどんな学術よりも、人生の意味を洞察し、個々の人間の経験の中に深くひそんでいるあの世界的な規模の現実感を把握することが可能なのである。

こうして文学は、従来越えることのできなかつた限界を越えて、人間どおしの理解に新しい道を開こうとする。実際、個々の人間は人間全体の産物であり、あらゆる人が全世界の代表であるのだ。従って、文学の仕事と目的は世界的なものである。現実を探究する作家は、万人に役立つ真実の世界を発見する。読者はその世界の中に、自分ひとりでは発見することのできなかつた驚異と豊饒を感じながら、生きることができる。彼はその世界で、永遠の意味をつかんで、充実した経験を享受することができのだ。

文学とは、人間の心の伝達がより豊かで、より自然になされる

る意味の世界の探求である。とすれば、世界文学こそ、変化に富んだ広大な沃野や未開の土地を提供するものであることは、容易に結論づけられよう。「世界文学」(ドイツ語で Weltliteratur)という言葉は、ゲーテが用いて以後、ごく自然にうけいれられるものとなった。英語では、この言葉はあまりにも包括的にきこえるらしく、とりとめのないセンチメンタルな国際趣味ということでは非難されてきた。そして、「一般文学」⁽¹⁾という言葉の方がよいという人もいる。ヴァン・ティエームは「世界文学」を比較文学の概念と結びつけ、その結果、その領域をせばめてしまった。オースティン・ウォーレンとルネ・ウェレックは書いています——「普遍的文学の概念がどのような困難に遭遇しようとも、文学を一つの全体的なものとして考え、言語の違いを顧慮しないでその成長と発展を跡づけることが、重要である」⁽²⁾と。

今日の有力な文学研究は、しだいに強く、文学を文化の一部としてとらえ、ジェルジ・ルカーチュのいう「形式的批評規準とか、文体や文学技法とかに對するあの極端な関心」⁽³⁾をすてる傾向にある。

普遍的文学史の理想は、前世紀にはシュレーゲル⁽⁴⁾、シスモンディ⁽⁵⁾、プーテルヴェック⁽⁶⁾、ブランデスが推進したが、現在、彼らに匹敵する巨大な擁護者はいなくなっている。方法論の細部でどのような改善を加えても、またわれわれの情報源がどのように豊かになっていても、普遍的な文学史を書いたあの大家たちの理想と野心に帰することは、いぜんとして焦眉の急である。国家を超える規模で、多くの要素を総合した文学史が、ふたたび書かれなければならないだろう、とウェレックは断言している。「芸術と人間

性が一つであるように、文学は一つである。そしてこの考えの中に、史的研究の将来があるのだ。」

ドイツのロマン主義とイギリスのロマン主義との比較研究を通して、ルネ・ウェレックは両者の際立って独創的な特色を明らかにしようと試みた。⁽⁹⁾同様に、比較文学の研究はますます多くなされ、さまざまな文学運動や、国家的特性や、作家の個々の力の理解に、価値ある結果を生み出している。このことは、間違いない、東洋の文学思想と西洋の文学思想との比較研究の正当性をも、証明するものである。

われわれは、文学の領域を明確にしながらも、同時にその研究の範囲や、文学解釈の精神をひろめる必要がある。トインビー⁽¹⁰⁾は広い視野によって新しい歴史概念を確立したが、その例にならって、人間性にねざあらゆる学術を拡大することが、是非とも必要である。

思想が普遍化する傾向のある今日のような時代において、「世界文学」はあらゆる国の偉大な作品を集め、国境や国家的偏見を顧慮せずに、それを広く知らせようとする。そのような世界文学は、新しい刺激を与え、新鮮な示唆を豊富にし、すべての人間のものたる遺産を築きあげるのに、無限の価値をもつものとなる。

過去五十年間、自然科学の領域の拡大はめざましいものがあつた。それとともに、人文科学の拡大があらゆる分野ではじまっている。自然科学の知識が途方もなくふえ、どんな専門分野にも広大な世界が開け、もう人間にすべての人間的知識を受け入れることができなくなつてしまったことは、現代文化に大きな危機をも

たらした。人間が自分の生きている宇宙のすべてを知ることさえならなければならなくなつた瞬間は、文化の悲劇的な瞬間であつた、とハイデッガー⁽¹¹⁾はいつている。しかし、なおかつ、すべての人は、自分の精神の傾向によくあつた選択をなすことによって、真の幸福のために役立つものを認識し、人生を尊く美しくする有益なものを見逃さないための、あの貴重な知恵に到達することができるとがである。

二つの文化の間にあるギャップ——というのは、人文科学^{ヒューマンサイエンス}との間にある一般的文化の領域のことだが——そのギャップを、文学以上によく埋めることのできる精神活動を私は知らない。それは深い苦しみや楽しい成功と歓喜をもつた人間の内的生活を表現しうるのみでなく、他の人々との広い一体感、桜の花が咲いているのを見たり、おだやかな海や激しい嵐の海を見たりするだけで、宇宙との間に生じる霊的な交渉の感じをも、表現することができる。詩歌、小説、戯曲は、顕発する戦争や平和攻勢によって思想や価値を絶えず破壊され、新しい思想や価値も出現を妨げている愚劣な世界になじめない人の生活において、今日、従来よりもはるかに大きな役割をになつている。文学にこそ、人間の知識の統合推進という仕事がゆだねられるのだ。そしてこの統合がないと、あらゆる科学は無益な断片にくずれ散つてしまう。哲学が専門化し、その領域を科学に奪われるにつれて、それだけ一層、文学はその視野を広め、より遠くの地平にまで達するようになるだろう。詩歌、小説、戯曲が、現在、密閉趣味^{ヘイグロウ・タシュ}やひからびた形式主義^{フォーム・イズム}に後退しているのは、従来よりもはるかに大きな文学の責任に直面して、恐怖と回避の反応をおこしているのだと思われる。

作家たちは、今日、未来の展望を前にして畏縮している。そのため、彼らはわれわれと五十歩百歩のところにいて、彼らの本来の場所、未来を宣言しその形成を助ける場所にいないのだ。

文学の科学的研究(文芸学、ドイツ語で Literaturwissenschaft)は、過去五十年間、大した手柄をあげなかった。それは自分の領域をひろめるよりもむしろせましくし、文学の独立した構造を把握しないで終ってしまったのだ。しかし西洋と東洋というような大層離れた二つの文学的遺産を考察する場合には、こういう欠陥におちいる危険がない。西洋文学の出版をしるした天才ホメーロスから、その偉大な普遍的作家ゲーテや、あるいはトルストイにいたるまでに、二十六世紀の期間がある。日本文学は、八世紀に完成された歌集『萬葉集』(Manyōshū)にその出版をおくとする、はるかにずっと短い期間のものである。しかしこの相違は、日本の文学的産物を西洋のどこか一国だけのそれと並べてみただけで、完全に違った様相を呈する。

たがいに何の關係も交渉もない異なった国で、文化現象が同時に發生することは、よく知られている。この事實は、人間性には共通の地盤があること、人間相互にはわれわれが科学的に知っている以上のきずながあることを、示している。文学の社会的な面は、まだ少ししか探究されていない。東洋文学と西洋文学との間の類似や相違、それに両者の遭遇の有様は、さらに少ししか探究されていない。日本文学のある種の現象は、西洋文学の経験を導入しないではうまく説明がつかない。日本の小説や日記は、平安時代の日本の文化界に支配的だった漢詩文の教養を別にすると、なぜ不意にあのような土着的力をもって出現したのだらう

か。また英雄崇拜の理想を他のどんな国よりも実践した国で、なぜ英雄叙事詩が見出されないのだらうか。

われわれは、日本が長いあいだ中国文明の端に生き、また今日も、西洋文明の端に生きていることを、忘れてはならない。この事實は、日本文化により多くの流動性を与え、日本を外部からの影響の浸透しやすい国にしている。また日本が長いあいだ外国との交際を閉ざしていたことも、記憶しておかなければならない。多分この孤立は、日本が他と接触した時には、この国を一層浸透性の強い国にした。こういうユニークな環境は、文化の発展の研究に光明を投げかけ、またそれへの関心を鼓舞する。こういう広い文化的な枠の中においてみると、土着の源から生まれ独立して発達するものと、輸入され外国の影響から成長するものとが、より明快に見えるようになるのだ。

日本文学が西洋の作家に及ぼした影響は、いままでのところ非常に少ない。日本が前世紀の末のイギリスとアメリカのイマジストたちの間に喚び起こした関心は、新しいテーマと新しい表現形式との衝動と結びついたが、この情熱はなんら偉大な作家を生み出さなかった。多分この関心は、異国趣味と細かな絵画的表現とに終始した、皮相なものにすぎなかったであろう。ただ、日本がロマン派的趣味をもつと脱却した世代によって、真剣かつ客観的にうけとめられた時、日本文化ははじめて、イエイツ、クロードル、パウンドのような大詩人を鼓舞し、西洋文学に真の影響を及ぼしはじめた。しかし、この三人のうち、パウンドだけが、日本との關係で深い意味をもっているといえる。彼はフェノロサの翻訳を通して能を研究し、日本詩歌の理解を得、それによって彼

の『詩篇』^{カタル}の中で東洋と西洋の詩の総合を行うことができた。

パウンドは、日本文化は東洋と西洋との仲介者となりうる唯一の東洋文化だと考えた。彼の前、および後には、ウォルト・ホイットマンとエイミー・ローウェルが同じ希望を表明した。ラフカディオ・ハーンとフェノロサについては、いうまでもない。今日、アール・マイナー教授もまた、「アジアの諸文化の中でほとんどただひとり、日本だけが東洋と西洋との会合の場を提供するという重要な役割を演じてきた」と考えている。

日本を先進国の先頭に押し出した高度な経済的發展と、日本人が西洋の技術に加えた革新とは、日本と西洋との間のギャップを日ごとになくしている。だが西洋人は、日本人自身が西洋に近づいたと感じているほどには、日本を西洋に近いものと考えていない、といわなければならない。

西洋の文化は、極東に広く知られている。イギリス、アメリカ、ドイツ、フランス、ロシアの主要作家は、日本の小説や詩歌に影響を与えている。また逆に、日本人の心理は、西洋に対して、すでに出版されたおびただしい数の本でもまだ研究しつくしえない特異さと不可思議さを提供している。日本人の生活様式は、およそ一世紀の間、神秘と魅力とを提供して西洋のファンに称讃されてきた。しかしながら、日本人の人生に対する態度や、万古不變の島國的伝統に根ざしたユニークな社会的雰囲気や、仏教がアジア大陸に与えている特殊な精神的様相を、西洋人はまだ十分に理解しえていない。

今世紀のはじめから、東洋諸国の文化をその多様な面において真剣に研究し、東洋と西洋との知識と知恵を一つに合わせようと

いう注目すべき傾向が生じた。社会学、比較宗教学、歴史学、その他の分野で、価値ある研究がなされてきた。いまやこの新しい傾向を拡大し、文学をそれに含め、日本と西洋とで創造された思想と形式のうち、類似のもの、異なるものを調査すべき時機である。たとえば、日本（西洋に門戸を閉じていた時代の日本）とスペインとにおいて、ほとんど同時にビカレスク小説があらわれ、驚くべき類似性を示したさまを、検討してみよう。われわれが直面するのは、単に表面的な偶然の一致ではなく、実のところ、日本とスペインとの社会の特殊性に根ざした、たがいに呼応するところのある文学表現である。この両国の、地方主義と武力的封建主義から、商業主義と進歩的都会主義への發展は、根本的な類似性を示している。他方、叙事詩の問題がある。そこでは、サムライ日本とキリスト教ヨーロッパとの間に見出される相違が、ヨーロッパの偉大な叙事詩の勃興を新しい視野で眺めることの助けとなってくれるであろう。

文学にあらわれた二つの異なる文化の対比は、必ず立派な実りを結ぶに違いない。なぜなら、そのようにして見る文化は、豊かで多様な要素を——さまざまな形式と思想を、異なる経験と知恵を、異なる大衆的伝統を、異なる人生哲学を、異なる宗教を、つまり、実りある相違と刺戟的な類似とにみち、偉大な神話と象徴との生みの親たる土壌を顕示するからだ。

注1 ヴァン・ティエgem Paul Van Tieghem (一八七一—

一九四八) フランスの比較文学者。La littérature comparée (一九三二)——太田咲太郎訳『比較文学』一九四三